

11月 16日 (日) 創世記 17章	「主はアブラムに現れて言われた。『わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい』」(1節)。「全能」とは英語でオールマイティ。トランプでは何でもできる切り札。ただ聖書の「全能の神」はゲームの神ではない。愛における全能であり、自ら小さく貧しくなる全能である。強さを誇るのではなく、小さく貧しくなる信仰を祈り求めたい。
17日 (月) 創世記 18章	「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。主に不可能なことがあろうか」(13－14節)。主の言葉を聞いたサラの笑いは「そんなことありえない。御冗談を！」という不信仰の笑いだった。しかし、神はその不信仰を神の恵みを高らかにうたう賛美の笑い(21:6)に変えられた。信仰は、主への期待と信頼を学ぶこと。
18日 (火) 創世記 19章	「ロトはためらっていた。主は憐れんで、二人の客にロト、妻、二人の娘の手をとらせて町の外へ避難するようにされた」(16節)。ロトの戸惑いとためらいを主は笑うことも叱ることもせず、「憐れんで」くださった。私たちも主の憐れみにどれだけ救われてきたことだろうか。主の憐れみを知らされた者として、今日誰かに、主の優しさを示すことができますように。
19日 (水) 創世記 20章	「アブラハムは答えた。『この土地には、神を畏れることが全くないので、わたしは妻のゆえに殺されと思ったのです』」(11節)。このアブラハムの言葉は、当時彼のような寄留者が異国の地で生きる際に、常に命の危険があったことを示している。ひるがえって今の日本は、外国籍の人々の目に「神を畏れることのない危険な場所」に写っているのではないか。

20日 (木) 創世記 21章	「ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。神はあそこにいる子供の泣き声を聞かれた。立って行って、あの子を抱き上げ、お前の腕でしっかり抱き締めてやりなさい」(17－18節)。ハガルの子イシュマエルの子孫はアラブ人と言われている。ハガルへの優しさに満ちた神の呼びかけを聴く時、ガザの母たちの涙をご自身の涙とされている神が見えてくる。
21日 (金) 創世記 22章	「アブラハムはその場所をヤーウェ・イルエ(主は備えてくださる)と名付けた。そこで、人々は今日でも『主の山に、備えあり』(イエラエ)と言っている」(14節)。「主の山に備えあり」という時、まず主がアブラハムに求められた信仰の厳しさをどこまで思うことができているだろうか。主の厳しさと向かい合った者だけが、主が備えたもう恵みの豊かさを知ることができるのだ。
22日 (土) 創世記 23章	「その後アブラハムは、カナン地方のヘブロンにあるマムレの前のマクペラの畑の洞穴に妻のサラを葬った」(19節)。マムレは、アブラハムがロトと別れて最初に住んだ場所であり(13:18)、イサク誕生の予告を受けた場所である(18:1)。神の約束に従い歩んだ夫婦の生涯には、不信仰も刻まれているけれど、それをはるかに超える神の慈しみと恵みが刻まれている。
23日 (日) 創世記 24章	「僕がまだ祈り終わらないうちに、見よ、リベカが水がめを肩に載せてやって来た。彼女は、アブラハムの兄弟ナホルとその妻ミルカの息子ベトエルの娘で…」(15節)。主を心から信頼し、主の言葉に従い続けたアブラハムに、主もあらゆる祝福を与えられた。そのアブラハムが信頼しすべてを任せる僕もまた、主を心から信頼し、その祝福に共に与る恵みをいただく。